



# 熊事研会報

## 第117号

熊本県学校事務研究協議会  
 発行人 会長 中村 光春  
 編集代表 事務局長 中村 勝美

### 目次

1. 会長挨拶	.....	p.1
2. 研究部便り	.....	p.2
3. 全事研静岡大会復講	.....	pp.2-8

## 会長挨拶

### 「今年度を振り返って」

今年度は、熊本県学校事務研究協議会にとって記念すべき40周年の節目の年でした。熊事研大会も40回記念大会に相応しく、田崎熊本県教育長から貴重な講演を聞かせていただく機会を得ることが出来ました。全体研究会の内容を振り返ると、まず今年の8月に迫りました全事研熊本大会における研究発表部の中間報告をさせていただきました。今までは、学校事務の分野ではあまり耳にしなかった「カリキュラム」という言葉に戸惑った会員の方もおられたかもしれません。しかし、現在の教育現場では、全ての職員が学校教育目標具現化に向けて、それぞれの立場で総力を発揮しないと学校教育は成り立たない厳しい状況になっています。そして、その学校の教育目標と直結しているのが「カリキュラム」であることを考えると、全ての職員が「カリキュラム」を理解し、その作成に関わることが組織としての教育力の向上につながることは当然であると言えるのではないでしょうか。また、福岡県市町村職員研修所研修課の工藤一徳専門員や兵庫教育大の日渡教授にもご講演いただきました。その後、「地域と学校の未来を考える」のテーマで文部科学省の風岡治さんをコーディネーターとして、県小中学校長会長や県PTA連合会副会長をお招きし、パネルディスカッションを行いました。この40回記念大会をとおして、これからの地域と学校の姿、そして、そこで果たすべき学校事務職員の役割が見えてきたのではないかと思います。

さて、全事研熊本大会（8/5～7）まで、4ヶ月あまりとなりました。宮本実行委員長をはじめとして多くの実行委員会の方々が中心となって、全事研熊本大会成功に向けて準備を進めています。学校事務職員、そして、子ども達の輝く未来のために、全事研熊本大会への熊事研全会員の参加を目標に進めて行きたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

熊本県学校事務研究協議会長 中村 光春

# 研究部便り

今年度の研究大会は例年までの1日目は全体会、2日目は分科会という方式から、2日間とも全体会方式のみの5部構成で開催しました。1日目は、第1部で熊本県教育長の記念講演、2日目第2部は、全国大会発表部の中間報告、第3部では福岡県市町村職員研修所工藤一徳様の講演、第4部は兵庫教育大学教授日渡円様の講演、そして第5部では「地域と学校の未来を考える」をテーマにパネルディスカッションを行いました。参加者アンケート結果から考察すると概ね好評でした。中には、分科会方式が良かったという意見もありました。確かに、少人数の方が意見が出やすく、活発な議論に繋がるとは思いますが、発表地区の負担も重く、研究発表のための研究になっているのが現状のようです。しかし、会員が年に1回集まる貴重な研修の場でもあり、参加者がともに活発な論議することが出来る機会となるような工夫は必要であり、参加者の中からは「聞いているのみだったので、疲れた。」などの意見もありました。会場の参加者も一体となり論議できるような内容のものも考えていかなければならないと思います。そのことも含めて、平成28年度の研究大会の内容について検討していきます。

研究活動については、昨年度より学校運営を支援する共同実施について研究を進めていますが、今年度は研究大会に於いて発表をするには至りませんでした。次年度は、先進地の調査等を実施して、更に研究を深め、熊本の共同実施の目指す姿を提案していきます。

次年度の研究大会は、全国公立小中学校事務研究大会(熊本大会)が開催されるために、開催しませんが、平成28年度の研究大会に向けて、会員の内容検討、組織の編成等に取り組んでいかなければなりません。そのためにも、現在の研究部の活動内容を再度見直し、研究の推進、研究大会の充実、会員への情報の発信ができる組織となるように、変えていく必要があると考えています。

また現在、文部科学省「チームとしての学校・教職員の在り方に関する作業部会」において、学校の教育力・組織力向上のために教職員等の役割分担が必要であるとされ、その中で事務職員のこれからの役割について論議されてます。そのような国の動きを踏まえて、研究部でも、これからの事務職員の役割を明らかにした上で、熊本県の事務職員の目指すべき方向について研究を進めていきたいと考えています。平成27年度の全国公立小中学校事務研究大会が熊本県学校事務研究協議会の新たなスタートとなるように活動を推進していきたいと考えています。本年同様、会員の皆様のご協力をお願いいたします。

熊本県学校事務研究協議会 研究部

# 全事研静岡大会復講

山鹿市立鹿北中学校 事務主任 森 安彦

はじめに

全事研大会に初めて参加した宮崎大会(1991年)。全国から事務職員が一堂に会し、さまざまな人の意見が聞けたこの大会は、迷いや悩みから少しずつ仕事への意欲をなくしつつあった当時の私にとってとても刺激的で、自分の視野を一気に広げてくれた。けれど、経験を重ね、時代と共に忙しさに追われていく中で、「研究実践が必要だと頭では分かっているけど」、大会に参加する気持ちのゆとりや意欲は次第に薄れていった。

今回、参加するに至ったのは、仕事に追われ、無気力になりつつあった自分を変えたいという思いと、何よりも校長が「自ら学ぶ機会を作る」よう私に求めてきたことが大きかった。校長は全事研静岡大会の開催要項を見たとき、私に「この大会に行ってきたなっせ。」と言ってきたのだった。

#### 大会1日目

最近では福岡大会(2009年)以来の参加になった。開会式では参加者は2000名を越えたと紹介あり。(大会最終日には、最終的に2500名を越えたと報告があった。)

開会式やオリエンテーションの後、文部科学省の行政説明があった。その中の一部を紹介すると、教育再生実行会議についての「これまでの提言」と「それを受けた取組」の中で、たとえば第一次提言「いじめ問題等への対応について」(平成25年2月26日)を受けて

①「いじめ防止対策推進法」成立。(平成25年6月21日)

②「道徳教育の抜本的改善・充実」については「道徳教育用教材「私たちの道徳」の作成・配付、「心のノート」の全面改訂」

また、(直近の)第五次提言「今後の学制等の在り方について」(平成26年7月3日)では

- ・無償教育、義務教育の期間の見直し
- ・小中一貫教育の制度化
- ・教員免許制度の改革、養成や採用、研修等の在り方の見直し

といった内容について、平成27年通常国会から順次、関係法案の提出をめざすとしている。安倍内閣になって教育再生実行会議でこんなにも矢継ぎ早に提言がなされていたことを初めて知った。と同時に、改めて教育を取り巻く課題の多さに気づかされた。

#### 全体研究会「学校マネジメントと人材育成」

パネルディスカッションより

コミュニティスクールは全国に1900余りある。事務職員には積極的に関わって、学校マネジメントだけではなく、地域づくりの力をつけてもらって、地域の人材を育て、事務職員の人材も育てることが重要との意見あり。

#### 大会2日目

静岡支部の第6分科会「信頼される学校づくりのために、学校事務職員(わたしたち)にできること～

キーワードは経営参画・協働・人材育成～」に参加する。沼津市事務研が発表。

(個人的には)市事務研が発表するのは意外だった。静岡県全体で取り組んだ実践という体裁をとると思ったから。ただ、沼津市の実践は素晴らしかった。

実はこの分科会を選択した理由は、開催要項に「・・・新たな展開を始めた共同実施を活用した研究成果の実践、それぞれの長所を生かした他職種との協働・・・」と第6分科会を紹介してあったことによる。沼津市の共同実施とはどんなものか期待して望んだが、良い意味で裏切られた。この共同実施は純粋に教員の事務負担軽減をめざしたものであったのである。(平成14年度より沼津市内の1地区9校のみで実施)熊本県とは状況も目的もそもそも違っていて、すぐに参考に来れるというものではなかった。沼津市では加配された共同実施主任が他の学校の事務を集中処理して、そこで生み出された時間で他校の事務職員が教員の事務を肩代わりするというものだった。その後、平成24年度から市内全42校の連携による共同実施に移行した。そこでの実践は事務職員のための共同実施ではなく、学校全体、教職員も巻き込んだ組織的な学校事務の改善により、教育活動の支援をめざすというものだった。その研究の取組の成果が、別の階にさまざまな資料や冊子として展示されていたが、「学校事務ハンドブック」や「事務職員版危機管理マニュアル」「質疑応答記録集」など熊本県大会でも似た取組や実践はあったと思うが、(組織的な取組の)必要に迫られたせいか、丁寧で充実した内容が印象的だった。まとめの中で「飢え感を持って仕事を考え、自立的に学び続けることが大事。」との助言は心に残った。

## 大会3日目

記念講演。演題「心をつかむ人材育成術」。講師はサッカー解説者の山本昌邦氏。

「何でもかんでも教えるのはダメ。良い質問をするのが良い指導者」というフレーズは説得力があった。興味深かったのはサッカー選手を(技術×体力×戦略×心(メンタリティー))で評価して、学生の頃、同世代の中で決して評価の高くなかった本田選手や長友選手が一流選手になれたのは「心」の部分が100点だったこと。他の多くの選手は「心」の部分が弱かったことで一流選手になれなかったという話だった。教えられるのではなく、自分で考えることが大切と言うことと重なるのかもしれない。(ただ、長友選手の「技術」を20点と板書したときは会場は大爆笑だった。)結果が良かったときは、主語は「君たち」はよかった、となり、結果がダメだったときは、主語は「我々」は(ここが)よくなかったと言葉を選ぶ話も大変興味深かった。

閉会式で静岡大会の実行委員長が全事研旗を全事研会長に返還する様子はとても感動的だった。そしてその旗が全事研会長から熊本大会の実行委員長の宮本さんに渡された姿を見て、責任の重さを合わせて感じた。

閉会式が終わり、帰っていく人たちに向かって、熊本から来た実行委員会のメンバーといっしょに横断幕を持ち、声を張り上げ、次の熊本大会をアピールしたことが懐かしい思い出になった。

## 南関町立南関中学校 事務主任 藤井 優子

### 1 はじめに

8月6日・7日の二日間、全国公立小中学校事務研究大会静岡大会へ参加しました。6日は6時20分発さくら540号で新玉名駅を出発し、2回の乗り継ぎを経て静岡へ。途中大雨の影響で遅れたのもあり、会場へ着いたのは12:00。会場の静岡市清水文化会館「マリナート」からは、富士山はうっすらとしか見えませんでした。全国から2,500名を超える参加があり、会場は熱気にあふれていました。

これまで全事研大会へは宮崎・群馬・山口・兵庫・神奈川・愛知・福島・福岡(発表チーム)に参加し、今回の静岡で9回目の参加となりました。私が全国大会に参加する目的は、足りないものが多すぎる自分を少しでも鍛えることと、平成14年に参加した「公立小・中学校中堅事務職員研修講座」で出会った全国の仲間と同窓会で再会することの2つなのですが、キャリアを重ねるごとに新しい発見があり、とてもいい刺激になります。少しでも会場の雰囲気等がこの紙面でお伝えできればと思います。

### 2 全体研究会

テーマ 学校マネジメントと人材育成

ー学校力・地域力を高める人材育成ー

#### ①全事研活動報告

研究開発部長より「第2期学校事務のグランドデザイン」について説明がありました。

まず、第1期学校事務のグランドデザインの成果と課題について述べられました。

<成果>

○事務長製の制度化

○学校事務組織が地域学校経営を支える組織へと転換している実践

○会員の学校事務への取り組み方や業務内容の変化

○グランドデザインを策定している支部の増加(5割程度)

<課題>

◇事務長の配置が進んでいない

◇総額裁量予算制度・特色枠予算制度等の導入が全国的に広がらない

◇学校事務組織の組織運営が処理業務に留まっている事例が多い

学校事務の在り方や事務職員の役割を自らシフトしていくことが求められる

また喫緊の課題として、市町村教委との関係の再構築と教育関係団体との連携・協働の強化が揚げられ、そのために全事研と支部との連携強化、今後の全事研の在り方の再考が必要であるとのことでした。



②パネルディスカッション  
＜パネリスト＞

- 京都産業大学文化学部 教授 西川 信廣
- 一宮市立千明中学校 校長 高木 浩正
- 三鷹中央学園コミュニティスクール委員会 副会長 四柳 千夏子
- 徳島県東みよし町立三好中学校 主査兼事務長 赤松 梨江子

それぞれの立場から、コミュニティスクールの取組や思いを述べられましたが、ここでは私がメモを取った中から印象に残ったものについて書きたいと思います。

(西川教授)

- ・よく「小中連携」と言われるが「小小連携」こそ大事。中学校は小学校をまとめる苦労がある。
- ・「学校における地域とは何か」 地域：土の人、職員：風の人  
公立・私立にとっての「地域人材」とは？公立だったら校区となるが、私立だったら・・・？
- ・10年後、20年後いい方向での 多様化 であってほしい。  
自己成長がなければ、職の存在はない。養成、採用、研修、全部含めて教職員教育である。  
現職研修の必要性：積み上げ型から逆向き設計へ、キャリアのゴールが設定されていない

(高木校長)

- ・コミュニティスクールを「ツール」として活用。目的ではなく手段である。何に生かせるのか、何ができるのかを整理する。

たくさんの人（大人の目）を入れることで「不安を安心に変える」

- ・学校長のマネジメント力

校長会・教頭会でどんなことを話している？ → 連携できることを模索・意思統一・情報交換

- ・校長にとって事務職員は参謀である。力量を高めるための研修を自ら進んで受けてほしい「V・S・O・P」

V・・・Vitalityバイタリティ 20代、S・・・Specialityスペシャリティ 30代

O・・・Originalityオリジナリティ 40代、P・・・Personalityパーソナリティ 50代

(四柳さん)

- ・CSが導入される前は、小中の交流がなかった（運動会が同じ日だったことも）
- ・小学校区ごとに地域を形成 → それを束ねるのが学校運営協議会
- ・予算執行はCSが決裁権限を持つ
- ・学校の事務負担軽減：開催文書、お茶出し、議事録etc 「自立した活動」
- ・学校側のビジョンだけでなく、地域の思いもある。コーディネート能力が求められる
- ・先生の「支援者」として授業に入る。守秘義務は当然。一定のルール（マニュアル）が必要。多くの人に関わるようになればなるほど必要となる。
- ・役割分担も必要。隙間を埋めるのがコーディネーター。

(赤松さん)

- ・事務職員のリーダーシップ

気配り（いつ・どこで・誰が）、根回し（どうすれば実現？）、決断力（やる？やらない？）  
実行力（今からやる）、高いアンテナと鋭いセンサー

- ・アイデアは口に出す

自分のつぶやき、誰かのつぶやきみんな捨てないで  
すべては誰かと誰かが話をするところから始まる  
子どものため、学校のためとなると思うことならあきらめない

- ・人をつながる学校づくり

つながること  
コーディネートは事務職員の仕事  
事務グループでできること

学校事務のための12の基礎力								
能力	対	10	20	30	40	50	60	キーワード
反応力	人	☆	☆					コミュニケーションの基本
愛嬌力	人	☆	☆					笑顔で。メンターを得られる。
楽天力	自己	☆	☆	☆	☆	☆	☆	ストレス解消力。学習視点。
目標発見力	課題	☆	☆	☆				問題解決を目標とする。夢
継続学習力	自己		☆	☆				学習する習慣
文脈理解力	人		☆	☆	☆			意見調整する力
専門構築力	課題			☆	☆			自分の強みをつくりあげる力
人脈開拓力	人				☆	☆	☆	人を開拓し、関係を維持する力
委任力	人			☆	☆			人に頼み任せる力「悪魔の声」
相談力	人				☆	☆	☆	カウンセリング力
教授力	人				☆	☆	☆	しゃべりすぎない
仲介調整力	人				☆	☆	☆	コーディネート力

「仕事のための12の基礎力」大久保幸夫著 よ

### 3 分科会

#### 第3分科会 愛知支部

2020年を目指す ―いま、愛知事務研の転機―

愛知事務研は、急速に世代交代が進んでいるようで、20代・50代が30%を超えているそうです。熊本も世代交代とあわせて行政・県立との交流が進んでいくものと思われるので、これからキャリアを重ねるにあたって自分に必要なものは何かを考える機会となればと思い、この分科会を選びました。

前半は若手事務職員が後輩事務職員から教わる対話形式を盛り込んだ、参加者を飽きさせない工夫を施した提案でした。

学校事務職員の役割「3 t o r (スリーター)」

- ・管理する役割 アドミニストレーター (administrator)
- ・調整する役割 コーディネーター (coordinator)
- ・促進する役割 ファシリテーター (facilitator)

★これら3つの英訳語の語尾が「t o r」で終わることから作られた造語

また、事務職員を一本の木に例え、根から栄養(研修)を取り入れ、成果につなげていこうとする研修の在り方を図式化し、分かりやすく説明されました。

次にグループワークが行われ、6名ごとのグループでアイスブレイクを交えてファシリテーションを体験しました。私はたまたま「ファシリテーター役」に当たったのですが、

- ・出てきた意見を頭ごなしに否定したり、途中で意見を差し込まない
- ・テーマ外のやりとり(脱線)についてもある程度許容する
- ・結論を求めない

を意識しながら進めることは、何度か経験しないと身につかないものだと感じました。(どうしても何かしらの「結論」を求めてしまうので)

その後、地域連携と世代交代を見据えた人材育成をテーマに、シンポジウムが行われました。2名の助言者から様々な事例が提示され、事務職員としてどのように関わったらよいか、どのような能力が必要か示唆されました。「脳には『入力<出力』の法則があり、出力を基準として脳のパフォーマンスが変化する」という助言者のお話は印象的でした。若い世代もベテランの世代も、それぞれの力を出し切ることが次世代を築くことになると感じました。

### 4 感想・今後に向けて

静岡では「つくばの友」との再会や静岡おでん・桜えびといったグルメも堪能し、リフレッシュすることができたのですが、この大会に参加して、今の自分には判断力・決断力・マネジメント力がまだまだ足りないなということを痛感しました。

本校では、時々校長先生から「ミニミニ研修」として教育問題等の研修資料が配付されるのですが、先日配付された研修資料の中に、次のことが書かれてありました。

高校や大学で学んだ知識のまま、10年、20年対応していくことはできない  
めまぐるしく技術は進歩し、社会の仕組みも変化していく時代  
社会において自分の力で学び続けなければ、変化に対応しきれない時代  
～これからは学び続ける時代である～

これからは事務センター化もどう進むのか不安もありますが、変化に対応していくためには、自分から（できるだけ貪欲に）学ぶ姿勢が大事なのだろうと改めて感じたところです。正直、体もいろいろとガタが出始め、子育て（または介護）もいろいろと出てくる世代になり、事務の精度を上げるためにはどうしたらいいのかと考えることもありますが、メンタルの管理と人のつながりを大切に、日々精進していきたいと思えます。

### ～ 編集後記 ～

1年間という短い期間ではありましたが、定期異動に伴い義務制を離れることになり会報の作成業務もこれが最後となりました。拙い編集で読みづらかったかもしれませんが、最後までご覧いただきありがとうございました。

熊事研事務局情報調査部 田中

熊本県 学校事務

検索

熊事研

検索

URLを入力しなくてもOK！

上記のとおり検索をすれば熊事研HPへ簡単にアクセスできます。  
ブックマークへの追加、リンクは自由です。よろしくお願いいたします。

